

英佛聯合軍は大勝し、25. VI. Dunkirk は終に占領せられたのである。彼同盟條約の第四條は、英國の佛に對する要意を、見るに足るもので、當時の佛國の態度を考ふるに、足る所のものである。聯合軍は猶 Furies, Dixmude, Ypres, Menen, Oud nurc 等を占領し、西領の一半を占領し、英佛二國同盟の目的を達し得たのであるが、3. IX. 1658. Cromwell は逝去し、共和政府は間もなく倒れる、又西國は佛國と Pyrenées 條約を結ぶに至りて、(7. XI. 1659) 國際の形勢は全く變遷し、英佛同盟は自然に消滅したることとなつたのである。是等の交渉に於て、Cromwell の性急な熱烈な性格と Mazaria の巧妙な捕捉に難い様な性格とは、能く表はれて居つて、二國の至らんとする希望も見て居るのである。思ふに實に當時の英國の政策は、第一節に述べたやうな Ideen に導かれて居つたものである事は、是事件を通じて見ることが出

來、且 1651 頃より 1659 頃に至る、十年間の三國鼎立の西歐は其間に侵入計畫を挟むで、當時の徹底的な英國政策に由て、支配せられて居ることを認め得るのである。〔Cromwell's letters to Sir William Lockhart. (21. Aug. 1657) & (31. Aug. 1657) and to General Montague, on board the *Nasby*; in the *Duvas*, (11. Aug. 1657)〕 (大正五年二月史學研究會講演梗概)

*Kzf.* (6) "La république anglaise s'établissant, seroit une puissance à redouter pour tous ses voisins, puis que, sans exagération, cette puissance seroit cent fois plus considérable que n'étoit celle des rois d'Angleterre, etc."

### 考證學者としての伴信友翁(上)

文學士 阪倉篤太郎

#### 一 緒言

平田篤胤、香川景樹、橘守部と合せて天保四大家と數へられ、類書の高田與清、神學の平田篤胤

と並べて三大家と唱へられた伴信友翁は、考證學の泰斗として當世無双と稱せられる。その著はす所凡そ三百卷、輯録する所百五十卷、校訂する所二百五十卷、古文古歌の解釋、地理歴史の考證、逸文古圖の蒐集、國史神典の校正、言語音韻の研究、その他雜考隨筆の類に至るまで、何れも翁の細密な觀察と、該博な識見とを窺ふべきもので、一度

その博引旁搜周緻精確な考説を見聞する者は、敬服欣慕の情を起さずには居られない。従つて當時翁の名聲を傳へ聞いて、刺を通じて交を求め、或は書を寄せて教を請ふ者が三百名にも及んだ。

翁が公卿縉神の間にも優遇せられたことは、日野大納言(資愛)が「多劇の中先一通り書付置候迄にて、琢磨之功無之、誤見尤多と存候故、是迄一兩人に批難を乞候へ共、遠慮旁にて強而加言無之候。伴氏には精細之學術と心酔候。何卒閑暇に一覽、誤見之處必々無會釋被申越候様いたし度、稿

本二冊入一覽候」と書き送り、谷森外記(善臣)が三條大納言(實萬)の意を傳へて「返々も精密の考證、御感心に被存候由被申付候」といひ、水戸烈公が始めて翁の著書を上木し、紀州侯が屢稿本を借覽したのなどで明らかである。竹榮抄の如きは仙洞の叡覽に達したと言はれて居る。

交友の中では本居大平、加納諸平、村田春門、中島廣足、伴林光平、谷森善臣、中山美石などと深く交はつた。大平の如きは特に友情が親密で、「めづらか成御説ごも、深く考へ給へる事ごも奉感心候。愚評存寄は猶よく相考へしらべ候上にて可申上候。御副本もなく御草稿久しく御預り置候も心ならず、まづ返上候。但し御説は殘らず此方へ寫し置候。大同元年建立、古寺の柱材もてつくれる志乎利一枚、御詠御添御贈被下、めづらか成物にて珍重仕候。御懇情不淺候」など、言つて居る。かの傲岸な平田篤胤も、「君こそ大將の器におは

せ、予は先鋒なり臣なり弟なり、君は大將なり君  
 なり兄なり、とは申ながら、篤胤ほどの弟は外に  
 持ち給ふまじくと、是は少々みそけに御座候。中  
 略(土は火を成して、火に功をなさしむるは土也。  
 さて御名と予とは火と土との如し。予は火に屬き  
 御名は土に屬く。夫故かくの如く書入たる物など  
 を、皆予にゆづりて功をなさしむ。又御名と予と  
 は、荒魂和魂(予荒、君は和)、一体分身也と申き  
 かせ候ひき」と翁を推尊して、一時水魚の好を結  
 び、博識な翁から學問上に利益を得た所が尠くは  
 なかつた(イ)。

さて、かく生前に達人名士の敬慕を享けた翁の  
 名聲は死後も尙盛に學者間に喧傳せられて、その  
 考説が學界に多大の貢獻をなしたことは言ふまで  
 もないが、その多方面な研究を通じて著しく認め  
 られる特色は、翁が考證家として非凡な才識を具  
 へて居る點である。もとより翁の國學研鑽は、皇

道の式微を憂へる衷心から出たので、國史神典を  
 修めて敬神愛國の説を鼓吹し、勤王の大義を宣揚  
 するを旨としたことは、「事しあらば君が御楯と  
 なりぬべき身をいたづらにくたしはてめや」、「皆  
 人の心の底もつくしてし後こそ吹かめ伊勢の神風  
 」など、詠んだのでもわかる(ロ)。従つて國學  
 者としての翁の眞面目を闡明するには、その眞摯  
 熱烈な國家主義的思想に就いて吟味すべきは勿論  
 であるが、こゝには考證學者としての翁の研究態  
 度に關して、考察を加へんとするのである。

それには先づ、翁が考證家として名を成した原  
 因として、翁の天賦の性質と、當時の學界の趨勢と  
 を叙述することを必要とする。

(イ) 篤胤が翁と交を結んだ始の事は、篤胤が古史本辭經卷  
 四に

その睦びそめたるは、本居大平より紹介せしにて、文化二  
 年二月廿四日といふ日、翁二十三歳(篤胤二十歳)に、己が鬼  
 神新論を持って訪ひ行きたるを初なりける。互に學の道の意

あひて語らふに、世の限り兄弟となりて、大汝小汝神の故事をも引いていふに、我より年も三つ計り兄なれば、やがて兄のごご思ひてなむありける。

と記して居るが、また翁に送つた書簡によつて、篤胤が少しも腹臆無く、肝膽を披瀝したことがわかる。特に

こゝに小弟身上の事申候。奥しなき申事ながら、絶窮の様子・前後はつゝめて此節の苦しみ(中略)例のシマチリの小袖一つの處、うるしぬりの如くなりて、入湯にも行れぬ仕合(中略)此中にて古史傳の著述は意なく相つとめ申候。御憐可被下候。さて古人も、貧をかたるは求むることあるに似たり、とは申候事にて、他人には申がたき事ながら心有て君に申候。夫は其中でよく苦學をする、と兄にほめられむといふ弟の情にて、中々以て一兩や二兩や三兩や四兩のめくされ金の合力を望むかのやうに思召され被下まじく、そこらのいやしき心は露ばかりも無之事、神と君とはいひよくしろしめさむ。

と生計上の窮乏を訴へたのを見れば、如何に翁の知己に感じたかを察することができる。また學問上にも、珍書を求め得れば互に貸借してこれを筆寫し、或は新説を案じ出せば相通報してこれを批判し合つたことは、篤胤が

撰正卜考追々清書と遠察仕候。但し書竟給は、初に小弟へ御内見願候。なほ申べき事の候半歟と存候へば、先達而申上候後々にもくさく思伴候へ共、全書なければせん方なし。(中略)古史傳の中、青人草の初の考などは早く見せ奉り度事也。何に付ても君と予とかく離れ居て都合わろし。

撰正卜考の清書は、先小弟が考ごもを見せ奉り候迄見合せ給ふべし。又人に見する事も、篤胤にかして置たさても云て、よじにし給へ。

など、書き送つたので推量せられる。特に篤胤が翁の説を探り用ゐたことの少くなかつたのは、

神名帳はいつち跡に相成可申候。其故は(中略)此節日々か日の御書入を考索入用に付、寫させ候間も座右を離れ難く候へば也。乍去晚夏比には返上に可相成心組に御座候。程是大切に致し候にて、恩頼を蒙り候事は御遠察可被下候。

無據古史傳にかゝり申候。夫は會より會迄の間に致し候ことにて、引出は記傳と、神名帳御書入と、これまでの三記隠と部の書より外には出さず。(中略)初段古天地云々より第二十二段事戸度の段までにて、例の細書七八十丁のもの四卷、まづ此節迄は初編相成申候。(其内に信友云は三十四ばかりもあるべきか。其外に御書入より得ながら、信友とば

云ひがたくて云はぬのはいくらあるかしらす。

なごと言つたので知られる。然しかやうな親密な友情も、十五年ほど経いた後、終に破れて、篤胤は翁を「これはしも人にやあるとよく見ればあらぬけものぞ人の皮きる」と罵るに至つた。その絶交の理由としては、篤胤が古史徵開題記を上梓した中に、翁の考説を多く剽竊したためであるとも、篤胤が翁の行爲に對して忠告したことがあつたのを憤つたのであるとも、翁が篤胤を中傷した事があつたやうにも傳へられて居るが、氣質、思想の相違に基く所もあつたのであらう（比古婆衣、古史本辭經等參照）。

(ロ) 翁はまた兵書にも精しく、特に越後流の兵法の總典を極めたといひ、歌文の如きも、殊更に心を傾けたのではないが語句に端正高尚の氣韻がある。村田春門が嘗て翁の歌を評して、上下を着けて端坐するやうだ、と言つたのに答へて、冠を着て笏を正うする地に到らんことを希ふ、と言つたのを見てもその意のある所が推察せられる。

## 二 天 性

翁が資性敦厚で、謙讓の徳に富んで居た事は、交友知人の擧つて歎美する所であつた。翁の逸話

にはその例證となる事實が甚だ多い。例へば元旦の試筆に父母に送る年賀狀を以てしたり、藩侯友人の勸があつても、親のつけたものだからと言つて、州五郎といふ名を改めなかつたり、鈴屋大人（翁が宣長の學風を慕つて名薄を奉つたのはその歿後であつたが、大平がその篤志に感じて特に門下の列に入れた）の肖像を寫させて、命日には酒饌を供へ詠歌を献じてこれを祀り、實父母、養父母の忌日には、自ら膳を配し香を焼いて供養した事等は、師父を敬慕する情の切なのを見るべく、西生懷忠の自筆の跋文ある書を購ひ得て、「この書、いかにしてかはふれ出たりけむ。尋訪て返し得させまほしく思ひ居り」（比古婆衣卷十五）と言つたの等は、着實な氣質を察することができる。

また門人たらんと乞ふ者があつても、人の師表となるに足らずと辭して、皆學友として交はつた事や（ハ）篤胤の翁に贈る書に「扱又君と予と一人

づゝあらんには、いかにあらんと考候に、君ばかりにては成事おそく、篤胤にては仕損する事候は

ん。能く之をくらべて、例の御譲遜なく考へたまへ。(中略)夫故、一向に君を智者と頼み、かの主

(堤朝風)と二人並て兄と敬ひ、予が火の高ぶる

所を辭むる水土の知己と頼候覺悟に候也。但しかく申さば例の豈あたらんやなど宣ふべけれど、篤胤が心に定めたる事なればいかにせん」といひ、

大平が殘櫻記の後書に「此ふみ大平に見せにおこせてかくなむしるせる。これよみめて汝が心いかに、その思ふがまに——くんだり書をへてよ。我

は、世の人の人にはしふみこひ得て、そへまほしくする心とはことなり。必らず書のかざりにはしふみこふな思ほしそ、といひおこされたるもまたまめ心の一言と、かへすゝありがたく思ふまに——、此一ことをもかくかきそふるになむありける」と書いたのなどは、翁が物に誇らず、名利

を好まぬ一斑を示して居る。

この温厚謙讓の天性は、即ち翁が自分の考説を容易に公にしなかつた一因であつて、篤胤などは「先づ説法の眞柱を立置て、造作はあとでせんとする小弟流なり。夫に就ても、君は餘りに近頃ひろくものし給ふこと、愚弟はいかう思ひ過して、よいかげむにして早く造作に懸り給へばよいに思候也」(翁に贈つた書簡)と諫めて居るが、翁は「そも——質朴き古人の撰べる書は、なべて賢げなる事なく、專と往昔の傳、以前の書に據り、先輩の説をうけて書記し、後に善説を聞き善證を得ては書改め、或は前の見識も非とおもひ直せば書改め、或は意の達り難く思ひなせば其文を換へなごして、生涯これ必是とは決めざりつ、と推量れどしか拙なげなるぞ却て重厚く欣感きを、近世人のさもあらぬは、まことに賢しきのみにあらじかし」(古史徵開題記冬卷に引いた翁の言)と教へ、

篤胤が古史徵開題記に翁の説を載せたことを一又それより先に彼下書を平田篤胤に見せかたらひたるに、しばしとて持去きて寫しおきたりとて、己にも知らせず、古史徵の開題記にとり載て、板本にさへものしたりき。すべてかたなりなる考書などは、漫に人に借しては見すまじきもの也、とはかねて思ひながら心ゆるびてけり、と悔れどもかひなし」(比古婆衣卷十三)と侮いて居る(二)また長澤伴雄は、假名本末に序して「翁つねにいはいはれけらく、凡書の考説するさむはいとくかたきわざなり。さるは、年若きはごにいごよう解得たりきとおもへりし説の、後にわろく思ひなりぬる、又かたかりしことのやうく考出られたるなど、昨日今日どがはりゆくよ。から人もこれを木葉の散るにたとへていへるが如くにて、塵ばかりの誤なからしめむは、生涯つとむともいごくかたかるべし。されば其を板にゑりなどせむには、後の

悔やちたびすどもとりかへすべきものならず、とさごされたり」と記し、史籍年表の翁の自序にも「頃者有一親知、見而善之、勸再刪潤而與人共之。而予不肯曰、此年表所設、初念不至茲。故塗竄鹵莽之甚、未遑顧訂。且所取盈之書、雖傳播已傳人及遍知者、猶恐有遺。而予之固陋不自揣、敢以託名於博古君子之後、則內獨愧焉。遂辭不允」と言つて居る。即ち校合穿鑿の足りないのは、後世を誤ることを恐れた、めに、深く考へ博く見て、反覆精練を経た後でなければ、著書の上刻を敢てしなかつたのである。要するにこの眞摯恭讓な性格は、やがて翁をして未熟粗雑を厭ひ、博洽周緻な研鑽に努めしめた所以であることは、何の疑も無い。

次に翁が篤學勤逸であつたことは、友人長澤伴雄が乗物を用意して、嵐山の花見に誘つたのを、「行きて見ぬ人はあらしの山櫻花と文とはいづれ

まされり」と詠じて斷り、また或人の花見を勧めた時も、「いにへしの野中ふる道たざる身は花に心のつかぬ頃かな」とよんで、これに應じなかつたのもわかるやうに、日夜書齋に籠つて讀書著述に耽り、極暑には刀を机上に倒に懸け、嚴寒にも炬燵を用ゐずして、情氣の生ずるのを避けたと言はれて居る。尤も翁の體質は、若年からさまで健全でなかつた(ホ)が、平生深く攝生に意を用ゐる毎朝冷水で頭を冷したり、起床と臥褥との際に深呼吸を行つたり、朝夕庭に出て、櫛弓を引き、及引刀を揮つて体力を養つたので、七十四歳(安永二年二月二十五日生、弘化三年十月十四日歿)に至るまで精力が衰へなかつたのである。この倦むことなき勉勵と旺盛な研究心とはまた、翁の考説をして博引旁證、到らざるなきを得しめた所以である。

その他、記憶力の強健であつた事や、綜合の才

に富んだ事や、觀察力の發達した事なども、考證家としての適當な素質の中に、數へねばならぬのは言ふまでも無い。

(一) 加納詔平に贈る書にも

生涯博士だちたる心を持たまはず、人にも書にも同ふことを忘れたまひそ。自ら師とならんといふ一念あれば、直に學事に損なり。師と稱し候は人より恭ふ稱なり。弟子と稱すれども教を受くるもの、稱なり。師といひ弟子といふも白らの目よりいふべき詞にはあらず。殊に御國の學は漢などとは様子異れば、師弟の稱はなき趣なり。講習討論の上座とか長座とかいはいふべきものか。但しこれは小子が私言なり。考へ給へ  
と言つて居るのを見ても、その意のある所を知ることができ

(二) 篤胤はこれに對して古史本辭經卷四に

さて此頃或人、昔我が友とせし伴信友が假字の木末てふ書をもて來て見せたり。こは前に古史徴の開頓記をものせし時、また日文傳をものせる時など、いさゝか力をも加へたる人なり。故その囑分に依りて、何くれとその説等をも取容れて、世に其の名をも令知たりき。(但しその説等の中に、元



より己が意に合ざる事もありつれど、その囑みの黙止がたき故も有しかば、己が説と並べ載して、取舍は見る人の擇びに任せたるなりけり。然れど今思へば、後悔なる事ども多かる……(中略)或人問て云く、問題記に伴信友の説をも何くれと出されし故に、彼の人の名も世に知られて、翁と兄弟にも比ぶべきむつびなるべく、誰も思ふ事なるに昔我が友とせしとあるは、按の外なる事にて最いぶかし。争で其の由を委曲に聞む。答ふ。篤胤元より劣なき男にはあれど、朋と交はる道ばかりの小行をし、履失ふ者には非ず。我がその道を盡せる言の、返りて彼の人の耳に逆ひて、竟にかくは成行しなり、(中略)さてかく此の人に益を得つゝ、十五年ほど交らひけるに、文政二年(翁四十七歳、篤胤四十四歳)に、かの古史成文、同く微なきを板に彫るとき、信友云けらく、己れは才短く、はた仕へ事しけく暇なきが上に、身の病さへ腰張り勝なれば、息の内に功成さむ事覺束なし。汝は心さ速き生れがらにて、思ひ立たる事は必途ぐへき益究男なり。己が挂ても及ぶべき限には非ず。今よりは己が眞氣なき書撰の心を棄て、大人の功事の成るを待てむ。今日まで集めたる書ども片成なる考説の下書をも、皆がら譲るべし。取るべきは取り捨べきは捨給へ、

と物に書ても唆かし云ふに、諸と云て、彼の人の名を世に知らしめむと、彼の問題記にその説をもあまた書載たりけり。と言つて居るが、尙ついで

然るに吾にも佗にも、學びの外なる事にて、我が學びの兄弟ども頼める人に有まじき事とおぼゆる行ひの、何くれと心付てありしかど、云ひ難き事なるに、(中略)怨を匿して友とせし事また十年餘なるが、猶しも然る事どもあるに、己が國がらの本性の忍びかれて、文政十二年(翁五十七歳、篤胤五十四歳)の夏頃、我が家にて密にかの事ども五六條取り並べて切に諫めて、家の族よりも親しく思ふ君が、かゝる間はありては己が而伏ともなりて、自然に道行く人となし參らず事も有べしとぞ、わざと思はぬ事をも云て諫めけるに、(中略)穴悲し、是より後は自然にひまの出来て己はもその睦びを昔に背へじと思へど、己れ一尺すゝめば彼は二尺退き、われ三尺進めば彼は六尺退きつゝ、近き十年ほどは、吾れいかに訪へども彼は來らず。かの諫めつる頃より譲らむとて吾に屈たりし物等をも、次々に取りて遣せて殘りなく返さしめ、剩に世に得がたかりし新撰字鏡の抄本、字類抄、淨藏法師の傳などを始め、西に走り東にはしり苦心して聚めたる書ども、まづ彼れに寫させ置たるが多く、

その外にも己が本もて寫させし書もいと多かるを、後にわが本を無くしたるもあれば、今度の擧につきて借してよと云ひやるに今は亡しつ、佗の庫に入れ置たれば出し難し、など斷りを立て借さず。物學ぶ上にては斯ばかり悲き事はあらじ。また佗と我が事に及ぶごに、儒學のよきを顯露ならず云ひ聞しめかつ人に贈れる消息ごもに、種々のあごなし言の悪事をさへに書載せるが、世に弘まりて我が道の妨害になれる事ごも甚多かり(中略)然れば中善かりし程も、常に快からぬ事ごもありけり

と言つて居るのを見るを、まごににあさましい心地がする。  
(ホ) 鎮魂傳の序に

「おのれ若きほごよりすぐやかならず、つれいたはりがちにてありつるが、ごかくしてはたちはずぎぬれご、三そちをばいかゞはご、口あそびにもいふばかりにてなむありける。しかありけるにいつしか四十近くなりぬ。いまは此さかひはぬ越ぬご思ふほごに、やう／＼五十に近きほごより、いつごなく病ものぞこりゆくまゝに、昔より思ひつるやうにはあらで、たゞいきに生きて、七十に三つあまる、弘化の二年といふ年の元日といふ日にあひぬ」  
とある。

## エトルスキの遺跡 と其の文化 (下)

文學士 濱 田 耕 作

(ホ) チエルヴエテリの遺跡

ヴェイと共に羅馬より最も近き他のエトラスキの遺跡はチエルヴエテリなり、羅馬より西北約廿哩、パロの驛より瀛車を降りて北へ進むこと數哩にして丘陵の端に達す可く、其の一端にチエルヴエテリ (Corve' e'it) の村落あり、之れ古へのケレ (Crete) の遺蹟にして、中世「新ケレ」(Caere novum) (今のCariにてCerveteriの東三哩) に對する「古ケレ」Caere vetereの義より轉訛せる者なるがエトルスキの此地に占據する以前より早く先住民(所謂ベラスギ)の據れるところにして、